

普及センターだより 261号

家族経営協定の時代がやってきた



講演する五條満義先生



熱心に耳を傾ける参加者達

平成 15 年 9 月 25 日、東金文化会館で家族経営協定推進シンポジウムが開かれました。東京農業大学助教授五条満義氏より「家族経営協定の時代がやってきた」という演題での講演と、協定締結農家による事例発表が行われました。

後継者のポジションを明確に

成東町の中村俊雄さんから、「苺狩りで直接お客さんと接している中で、“洗わなくても食べられますか”という声に対して、自信を持って“大丈夫ですよ”といえる栽培管理を、食の安全という新しい分野として息子に任せた。協定を結んだことで、息子の農業経営での位置づけがはっきりし、新しい手応えを感じ頑張っている」という報告がありました。



役割分担で責任感・精神的自立ができた

多古町で有機の葉物栽培をする篠塚のりさんは、「自分の責任分担がはっきりし、現場も任され精神的自立ができました。今では、二つ目の法人の代表取締役になりました」また、後継者の自覚と進歩を期待して家族 3 人で協定を再締結。「まずは第一歩を踏み出す勇気が大事で、ダメなら変える、良かったらふくらますという姿勢でやってみることで」と参加者に呼びかけました。



文書にすることが目標への近道

文書化することでみんなが今やっていることを確認しながら、夢や努力目標を話し合ってみましょう。数字から現状がわかり、家族の中で経営を共有することで、農業経営の改善につながります。「ともかくやってみることが、目標への近道です」と会場から力強い意見が聞かれました。

シシトウ（施設栽培）のスリップス防除に天敵を利用して

シシトウ栽培で問題となっているスリップスの防除対策として、ミカンキイロアザミウマ等のスリップスを補食するタイリクヒメハナカメムシを用いた天敵利用試験概要を紹介します。試験は大網白里町で実施しました。

タイリクヒメハナカメムシは関東以南（一部東北地域含む）の主に海岸部に生息している体長2 mm程度の在来の虫です。

鋭い口先で、花の中等にいる微少な虫を手当たり次第突き刺し捕食するのでスリップス等の防除に活用されています。

利用の仕方は、市販の容器に充填された成虫を一定頭数ほ場内に放飼するものですが、今回の試験では500頭/10aを2週間おきに2回シシトウの栽培ハウス内に放飼しました。



試験は2つのほ場で行いました。両ほ場ともに放飼時にはほとんどスリップスは見られませんでした。天敵放飼後は、両ほ場とも徐々にスリップスが増え始めましたが、同時に天敵類の定着、増加も始まりました。

そのうちの、一方のほ場では1花当たりのスリップスが7～8頭程度になったのをピークに天敵が優先し、その後スリップスの発生は

減り、防除に成功しました。しかし、もう一方のほ場では途中、天敵に影響のある農薬を誤って使用したため天敵が死滅し、スリップスの増加を抑制することができませんでした。

農薬の散布によって天敵の防除効果が分かれる結果となりましたが、農薬選択に注意することで、シシトウ（施設栽培）におけるスリップス防除への天敵利用の可能性を見出すことができました。

堆肥化シート等による簡易な処理・貯蔵の工夫

家畜排泄物法の猶予期限まで、あと1年となりました。本年5月に畜産農家総点検をおこないましたが、野積みや素掘りがまだまだ多いのが現状です。

成東町八角丈夫さんのところで、下図のようなシートを利用した堆肥づくりの試験を開始しました。糞乾燥ハウスからとり出した堆肥を3月半ばに堆積しました。内部の温度は50℃前後の状態が数ヶ月続き、排汁もでていました。9月上旬にすべてを取り出して水田に散布しました。堆積断面を見ると、切り返しなしでも半分ぐらいはモミガラがぼろぼろになるまで熟成していましたが、下部は未熟でした。この結果から2ヶ月に1回ぐらいの割合で切り返しができるよかったですとおもわれます。

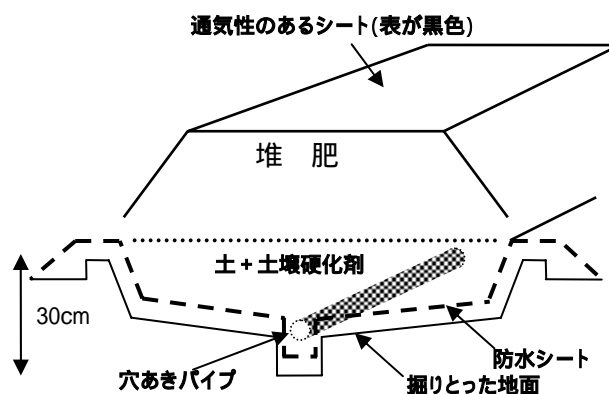
この方法では生糞をいきなり積み上げるのは無理です。副資材等と混合し、10リットルのバケツで7キログラム以下の比重でないと発酵は進みません。

ローダーでの取り出し時に地盤のぬかるみを防ぐ目的で硬化剤を使用した結果、全くぬかるむことはありませんでした。八角さんはさらに増設をして、切り返しのしやすいようにしていきたいということでした。

経費は約70㎡の大きさの場合で上下シートで10万円程度です。硬化剤は別途かかります。

夷隅や君津地域では、尿などの液体を安価な防水シート利用の、ため池（ラグーン）で簡易ばっ気処理し、無臭の液肥として利用している例もあります。

一人でやると手間や機械がいるので共同で作ればさらに安く済みます。県ではこうした簡易な事例集を作成中です。皆さんの経営にあった方式と一緒に考えていきましょう。



イチジクの品種選定と開園ほ場について

～品種選定～

イチジクの品種は、わが国では約 50 品種が導入されていますが、営利栽培向きの品種は、柵井(ますい)ドーフィン、蓬萊(ほうらい)柿(し)、ホワイトゼノアがあります。柵井ドーフィン、大果で収量がもっとも多く、樹勢も中程度で作り易いですが、寒さに弱く厳冬期に-5℃が頻繁にくるような条件では枯死する可能性があります。わが国のイチジク栽培面積の 70%以上を占め、都市近郊で主に秋果(今年の新梢に成った果実)が生産されています。

この品種の導入が難しい地域では、比較的耐寒性のある蓬萊柿、ホワイトゼノアが適しています。

～栽培適地・柵井ドーフィンの場合～

イチジクは、完熟しないと風味や味が乗らず、果皮・果肉が軟らかいので痛みやすく、日持ちが短い性質があります。消費地に近い山武地区では、熟度をあげ、朝取り等で美味しい果実を提供できる可能性が大いにあります。柵井ドーフィン、前述したとおり寒さに弱いため日当たりの良い場所を選定します。果実の品質を大きく左右しますので日当たりは重要です。

風あたりは少ないほうがよく、防風網を設置するとよいでしょう。土壌は、土層の深い砂壤土ないし壤土がよく、土壌酸度は、中性(6.5～7.0)が良く、水はけの良いほ場を選びます。転換畑では、土壌が過湿となりますので、畝たて栽培をします。

～苗木の準備～

イチジクは、挿し木により簡単に自家育成ができます。挿し穂は、冬期のせん定の際に充実した一年生枝を採取・貯蔵します。挿し木の時期は、当地では、三月上、中旬に行います。ほ場が選定され、植え付け準備が整えば直接挿すこともできます。

苗木は、一文字整枝栽培で 10 a 当たり 100 本程度(畝間 2 m × 株間 5 m)必要ですので余裕を持って用意します。

直売所あんな工夫・こんな工夫

きらっと光る売り方

直売が盛んになってきた今、売り方にもアイデアを活かして自分の商品をPRしましょう。各地でみつけた売り方を紹介します。

<特徴を伝える売り方>

同じ種類の商品が並ぶ直売所では、お客さんに自分の農産物の特徴を伝える必要があります。

メッセージカードを添えて

自分の農園の住所・電話番号セールスポイント等をいれておきます。



ポップを上手に活用して

商品の隣にメッセージを書いた紙を添えます。紙は、透明シールの中にはさむ（パウチ加工）としっかりしていて水にも強いです。

<切花のきれいな売り方>

大き目のペットボトルの底をカットしてバケツの中に入れます。この方法により花束が倒れない・とりやすい・痛まない等の効果があります。花束が少なくなった時、すっきりとして見た目もきれいです。



フレッシュ・ニューファーマー

大網白里町 佐久間浩一さん

大網白里町柳橋の交差点を茂原市の方へ向かっていくと、両側の田圃がきれいなあたりの左手奥に洒落た直売場が見えます。



『いらっしゃいませ！』

車が着くなりニコニコと飛び出してきたのは温室メロン・佐久間農園の浩一さんです。さっそく直売場に入ると、美味しい温室メロンや浩一さんが自分で生産したお米が並んでいます。浩一さんは、米作りと直売という佐久間農園の新しい柱を立ち上げたところです。

『世界の農業を知りたい』！

平成12年、農業大学校を卒業した浩一さんは、国際農業者交流協会の研修事業を利用して2年間のアメリカ農業実地研修にトライ！ワシントン州での果樹生産やオレゴン州でのホップ・畜産・植木生産など様々な農業に接しました。

ビックリしたのはホップの作業でのこと。作業は1日24時間2交代制で、「眠らない都市」ならぬ「眠らない農場」でした。農業に対する感覚の違いは新鮮な驚きの連続でした。もっとも、広大な農地での深夜作業は、正直なところ眠かったそうです。

『そして、宝物を見つけました！』

研修の中で感じたのは、「仲間」の大切さ。研修先の農場では一人でも、ネットの掲示板やメールを使っていつも同期の仲間とやり取りし、お互いの経験を共有(シェア)することの大切さを実感しました。

この春は、研修の仲間を訪ねて南日本をまわったそうです。これからも、人とのつながりを育て増やしていきたいと話してくれました。

(佐久間農園のサイト <http://www5f.biglobe.ne.jp/~s-farm/>)